

『うつほ物語』の成立をめぐる

中 野 幸 一

『うつほ物語』の成立に関しては、従来も多くの先学によって物語の内部に立ち入ったこまかい成立論がなされてお¹り、その成果にも傾聴すべき所が多い。ことに首巻の「俊蔭」については、古うつほ今うつほの論など、有益かつ興味深いものである。本稿はこれら先学の業績に導かれつつ、ごく大まかながら『うつほ物語』の成立時期についての見取図を描いてみた。

一

『源氏物語』の「絵合」に「竹取の翁」と「うつほの俊蔭」の絵巻が合わせられていることは広く知られている。この「うつほの俊蔭」の絵巻の内容については、この絵巻を出した右方の女房たちの次のような言葉を通して、ある程度知ることができる。

俊蔭ははげしき波風におぼれ知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きけるかたの志もかなひて、つひにひとのみかどにもわが国にも、ありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心をいふに、絵のさまも、もろこしと日の本とをとりならべて面白きことどもなほ並びなし。

右の内容は、従来、現存「俊蔭」のいわゆる俊蔭漂流譚の部分を絵巻化したものと考えられているが、これを些

細に検すると、現存の俊蔭漂流譚とはいささか異なっているように思われる。すなわち、ここに記された限りにおいては、この絵巻の結末は「つひにひとのみかどにもわが国にもありがたき才のほどを広め名を残しける」というもので、俊蔭の琴の才能による身の榮達がその結末になっていたらしい。しかし現存の「俊蔭」では、知られる如く、波斯国の御門が俊蔭に琴をもつて仕えるようにすすめても、彼はそれを辞退して帰国しているし、日本へ帰ってから、式部大輔左大弁にまでなるが、嵯峨帝が春宮学士をかえて琴の師を仰せつけようとされても、それを断わっている。つまり現存本ではどう見ても「ひとのみかど」や「わが国」で「ありがたき才のほどを広め名を残し」たという結末にはならないように思われる。またこの「うつほの俊蔭」の絵巻は、唐土と日の本とをとり並べて描いたものであったようだが、そうするとここに見える「ひとのみかど」というのは唐土の御門のことと解せられる。しかし現存の「俊蔭」では、俊蔭はたしかに遣唐使船に乗って唐をめざして行ったのだが、途中難破漂流して波斯国へ流れつき、さらに琴の音を求めて仏の国へ行き、秘琴を得て再び波斯国へ戻り、そこから直ちに日本へ帰国しているの、唐土へは全く渡っていないことになる。(帰国後の俊蔭が昔を述懐して「いとなき程に父母を離れて唐土に渡されぬ」と言っているのは、遣唐使として唐土に遣わされたということで、実際に唐土に到着した意でないことは、すぐ後に「あたの風大いなる波に漂はされて知らぬ国に打ち寄せらる」とあるのによってもわかる。)とすると、唐土と日の本とをとりならべて描いたというこの「うつほの俊蔭」の絵巻は、現存の俊蔭漂流譚とは内容的にかなりの相違があるということになる。もっともこの場合の絵巻は絵合用に調製されたものであるから、物語との間に多少の差異があつてもある程度は容認されるが、このように物語の舞台やその結末が相違しているということは、やはり看過できないことと思われる。

さらにこの絵巻は、「絵合」の記事によれば、絵は飛鳥部常則で詞書は小野道風の筆であつたという。これらの

記述は所詮作り物語中のものなので、その信憑性がまず問題となるが、『源氏物語』の場合、史上実在の名称を持ち出す時は、当時の読者に十分納得のいくような、かなり史実に忠実な用い方をしているので、この「絵合」の記述も、ある程度の信憑性を認めてもよいと思われる。換言すれば、この記事は、当時の読者たちが常則・道風の筆になる「うつほの俊蔭」の絵巻の存在を、別に不審に思わないほどの信憑性をもつものということができよう。とすると、この絵巻は、常則・道風の名コンビが成立しうる時代——村上帝の天曆頃の制作と考えられる。つまり、『源氏』の読者たちは、天曆頃に『うつほ』の絵巻が存在したとしても別に不審を抱かなかったのであり、『うつほ』の絵巻に対する一条朝の人々のこのような時代意識を考慮に入れると、この絵巻の土台となった原「俊蔭」巻も、その頃すでに成立していたものと考えられるのである。

二

以上のような古い時期の「俊蔭」の存在を想定させるものは、他にないであろうか。次にあげる「蔵開」の記事は、その粉本ともいべきものの面影を伝えているように思われる。

「蔵開」巻では、仲忠が三条京極にある旧宅の蔵を開き、清原家代々の古文書や家集を御門の御覧に供しているが、この先祖の遺文については、所々に次のように記されている。

(A)家の古集のやうなるものに侍る。俊蔭の朝臣唐に渡りける日より父は日記し(引用の本文は古典文庫所収の前田本をもとに適宜漢字を宛てた。数字は古典文庫本のページ数である。)一(の力)つは、琵琶・和琴一つ、選り取り侍りける日まで、日付けしなどしてをきて侍りけるを、俊蔭帰りまうでけるまで、つくれることも、その

人の日記などなんその中に侍りし。それを見給ふるなんいみじうかなしう侍る。……かの文の序にいひて侍るやうにも、唐の間の日記は俊蔭の朝臣のまうでくるまではこと人見るべからず。そのあひだ靈そひて守ると申

したり。

(蔵開上 P 1053
1054)

(B) 昼の御座におはしまして、召し入れて、いづらと宣へば、沈の文箱一よろひ、浅香の小唐櫃一よろひ、蘇芳の大なる一よろひ持て参れり。開けさせて文箱を御覧ずれば、文箱には唐錦を二つに切りてえふし(たカ)めて、厚さ二三寸ばかりにつくれる、一箱づつあり。俊蔭の主の集、その手にて古文に書けり。今一つには俊蔭の主の父式部大輔の集、草に書けり。

(蔵開下 P 1061)

(C) さてのぼり給へば、よべの俊蔭の主の集を読ませ給ふ。……亥の時ばかりよりは、これはしばしとどめさせ給ひて、小唐櫃をあけさせて御覧ずれば、唐の色紙を中より押し折りて、大の冊子につくりて、厚さ三寸ばかりにて、一つには例の女の手、二くだりに一(うカ)かた書き、一つには草のくだり同じごと、一つには片仮名、一つは草手、まづ例の手を読ませ給ふ。

(同・P 1089
1090)

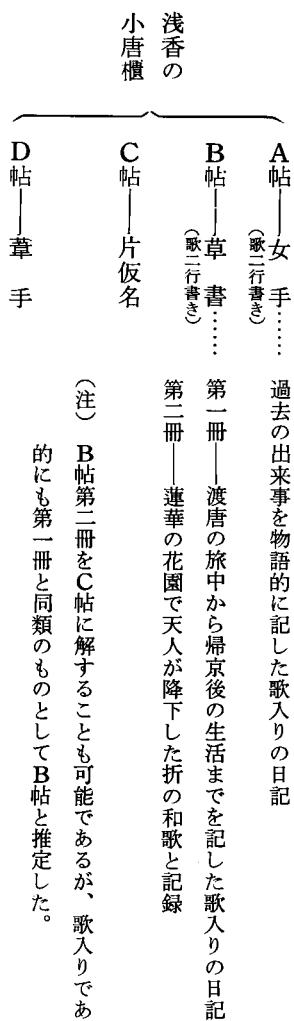
(D) したる様は、ただありつることを物語のやうに書き記しつつ、その折の歌どもをつけたり。面白き所も悲しき所もありて。(希カ)

(同・P 1091)

(E) これはしばしとて、今一つをとて御覧ずれば、これは俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りたりける間よりはじめて、京にむすめの上を言ひそめて、言ひつつ折々に歌あり。……又、ことにとりかふる巻は、蓮華花(の脱カ)園にて天人かけり給ひし時、よみあつめたる(こと脱カ)ども、そのよししるせるなり。

(同・P 1092)

右の引用のうち、(A)は前田本に乱れがあるが、俊蔭の渡唐の間、その父清原王の日記したものがあつたとしており、(B)によれば、沈の文箱の中に古文で記した俊蔭の自筆の歌集と、草書の俊蔭の父の集があつたことが知られる。また(C)によると、さらに浅香の小唐櫃の中には、平仮名・草書・片仮名・葺手書と、書体を変えて記した四種の本が入っており、その中の一冊は、(D)にあるように「ただありつることを物語のやうに書き記し」た日記物語的な性質のもので、和歌も挿入されたものであつた。さらにもう一冊は(D)に見えるように、俊蔭の渡唐歌日記ともいふべきものであり、また別の一冊は、これも(D)に見える如く、蓮華の花園で天人が天降つた時に詠み集めた和歌や、その時の様子を記したものであつた。この中でとくに注目したいのは浅香の小唐櫃の中のもので、それらを改めて整理して示すと次のようにならう。



右のB 帖がとくに現存の俊蔭漂流譚の部分と一致しており、その粉本と考えられるものであるが、俊蔭が渡唐していることや蓮華の花園その他の場面に歌が存在していることは現存本と異なっている。また渡唐のことは『源氏』の「絵合」の記事と一致しており、「絵合」に見える「うつほの俊蔭」の絵巻の土台となった原「俊蔭」の面

影を伝えているように思われる。

三

現存の「俊蔭」巻の中にも、古い形の物語を思わせるものがあるということは、従来もいろいろと指摘されていることである。⁽²⁾とくに語法の上で現存「俊蔭」が古うつほと今うつほとに区別しうるといふ結果は看過できないことであるが、さらに次の一条なども、原「俊蔭」の伝奇的な一面を残しているように思われる。

われら日の本まで送り奉らまほしけれど、山口をだに出でぬ輩なれば、別の悲しびにここまでだに参り来つるなり。ここにて日本国まで送り奉るべき人をさぶらはせんと宣ひて、いささかなる法をつくりかけつ。

(俊蔭・P 22)

右は、仙山で七人の人から弾琴の秘伝を授かった俊蔭が、いよいよ日本へ帰るに及び、七人の仙人が別れを惜しんで言った言葉であるが、ここに「日本国まで送り奉るべき人をさぶらはせん」といって「いささかなる法」をしたと見えるのに、現存本にはその俊蔭を送ってくれる人というのは全く姿を見せていない。これは古本「俊蔭」から現存「俊蔭」を作る時、不用意にも古本の痕跡を残してしまったと見られるものである。

また俊蔭が得た琴に仙人が自分の手の血で書きつけたという十の琴の名は、一体何から得たものであろうか。前に天女が名付けた二つの秘琴はなん風・はし風であつたが、このなん風については「難風」を宛てる説もあるけれども、『札記』に「舜作五絃琴二歌三南風」とあり、舜が初めて五絃琴を作つて歌つた歌の名で、これに依つたものと思われる。はし風は「波斯風」であらう。

仙人の名づけた十の琴名は、りうかく風・ほそを風・やどもり風・山もり風・せた風・花ぞの風・かたち風・み

やこ風・あはれ風・おりめ風で、從來その出所が不明とされているが、これらを通覧して気付くことは、その名がいずれも特殊な名称ではなく、細緒・宿守・山寺・花園・都・哀などのように、ごくありふれた一般語句をそのまま用いているかのように思われることである。このことはこれらの琴名がしかるべき故事典籍をふまえての命名ではないことを物語るものであらう。所で、「俊蔭」巻でこの琴名を列挙した直前の記述を見ると、つぎのような表現が目につく、例えば天稚御子が天下つてこれらの琴を作った所には、

かくて、すなはち音声樂して、天女くだりまして、うるしぬり、たなばた緒(に脱ぐ)より上げさせてのぼりぬ。

(P 12)

とあって、ここの「たなばた」から織女風(おりめ風)が、「緒より上げさせて」から細緒風(ほそを風)が命名されたように思われる。同様に、「この林より西に当れる梅檀の林に移ろひて」(P 12)とある所から梅檀風(せた風)、「この山より西に当れる花園に移りて」(P 13)から花園風、「あはれなんぞの人か」(P 13)からあはれ風、「阿修羅を山もりとなされて」(P 11)から山もり風が名づけられたのではないかと思われる。また、かたち風・やどもり風・りうかく風も、「阿修羅いかれるかたちをいたして」(P 7)とか、「大きな花の木のかげにやどりて」(P 13)とか「いかづちなりひらめきてりうに乗れる童」(P 11)とあるのと無関係ではなさそうである。みやこ風は現存本文中に關係する語句が見出せないが、異国に在る俊蔭が故国を想えばすぐに出てくる性質の言葉で決して特殊なものではない。また「花園」「梅檀」「あはれ」などの語句もこの前後に幾つか散見されるので、必ずしも前掲の例から出たものと見なくてもよからう。とにかく「俊蔭」巻においてこの琴名を列挙した前のほんの四、五ページの記事中に、このような琴の名を連想させるような表現が見られることは、単なる偶合として看過できないことであって、前述の如くこれらの琴名が一般語句的な命名であることと考え合わせると、他ならぬこの「俊

「蔭」の阿修羅から琴を得る一段が、その出所ではなかったかと考えられるのである。しかし、今自分が綴ったばかりの文章から、同じ引続きの文中の琴の名を取るといふことは一寸考えにくいことである。したがって、これはおそらく、古い形の「俊蔭」かあるいはその素材となったものの文章から、琴の名をとったと考えるべきであろう。この琴の名の典拠となった部分は、現存「俊蔭」においては俊蔭と阿修羅とのやりとりから蓮華の花園までの部分で、俊蔭の秘琴得授のいわゆる「古うつほ」と称せられる部分であり、これがまたさきのB帖に含まれる部分であることは興味深い。以上によっても、現存「俊蔭」に先行する秘琴得授の物語の存在が想像されるのである。

四

以上「俊蔭」巻の成立に関して述べ来ったが、ここで『うつほ物語』全体の成立について考えてみたい。

『枕草子』の「物語は」の段は、『うつほ』について次のように記している。

物語は、住吉、うつほのるい、とのうつり、月待つ女、かたのゝ少将、梅つぼの少将、国ゆづり、……

(能因本)

物語は、住吉、音ぎき、うつほのるい、月待つ女、くにゆづり、殿うつり…… (前田本)

物語は、住吉、うつほのるい、とのうつり、国うつりはにくし。…… (堺本)

物語は、住吉、うつほ、殿うつり、国ゆづりはにくし。…… (三巻本)

右の三巻本系以外の諸本に見られる「うつほのるい」という表現は、前の「住吉」にもかかって「住吉、うつほ」というようなたぐいの物語」というようにも解することができるが、『枕草子』の中でこの種の「——のるい」という表現が他に一つも使用されていないことから考えると、やはり『うつほ物語』がまだ長篇物語として統一的に

完成されておらず、「うつほ」の名のもとに数篇が寄り集まっていた頃の形態を示すものと思われる。現存の「俊蔭」「藤原君」がともに「昔」という書き出しをもっていて単独の物語のような印象を与えるのも、この「うつほ」の名残にほかならない。また、「殿うつり」「国ゆづり」が『うつほ』の「蔵開」「国議」であろうという意見もあるようだが、それは諸本の「物語は」の段にあげられた位置から考えて無理であろうし、また現存の「蔵開」や「国議」が構想的にそれだけで単独遊離するほどまとまっていないことから否定されよう。さらに又、何よりも後述のようにこの頃「蔵開」以後が出来上っているのは、涼・仲忠の優劣論は無効になってしまいうので、これらは他の諸物語と同様『うつほ』とは別個の独立作品であったと考えられる。

『枕草子』には中宮の御前で『うつほ』の仲忠と涼の優劣が論議されている段（三卷本八三段）があるが、その時期は長徳二、三年の頃と推定されている。一方同様の優劣論議が円融院や冷泉院の皇女たちの間で行なわれたことが『公任集』にも見えていて、これは円融帝の末年、公任の侍従時代（天元三十五年）のことであるらしい。この間は十五年以上もあって、物語の流行期としては少し長すぎるような気がするが、孝標女が話題の『源氏物語』を手に入れて夢中になって読んだのもやはり十余年後のことであるから、あえて長いと見るのは当らないであろう。それよりもこの長期の流行は、むしろ『源氏』以前の物語界における『うつほ』の声望を如実に示すものと考ええる。

この『うつほ』の涼・仲忠の優劣論争というのは、春と秋、鶯と時鳥などの優劣論とともに、挑み好きな当時の宮廷人の間に流行した論議であるが、とにかく論議を闘わすからには、どちらに組する者も勝算は十分持っているわけで、その優劣の結果がはっきりしていないことがまず大前提であろう。それは春と秋、鶯と時鳥などの場合と同様、あくまでも主観的な好悪による優劣の争いであり、それを如何に客観化し正当化して相手を屈服せしめるか

にその論議としての興味が存在する。したがって、『うつほ』の涼と仲忠が優劣論議の対象になり得たということ、そのどちらにも勝算が十分存在していたということで、一方を否とするような客観的な結果があつてはならない。とすると、この涼・仲忠の優劣論争が可能なのは、中村忠行氏もいわれた如く、『うつほ』⁽⁴⁾においては「沖つ白波」巻までであつて、「蔵開」以後は、涼はもはや仲忠の相手ではない。したがってこの論争が行なわれていた長徳頃は、『うつほ』はまだ「蔵開」以後が発表されていなかったと考えられる。

所で『公任集』では涼・仲忠の優劣論議に際して公任がつぎのような歌をよんでいる。

沖つ波吹上の浜に家居してひとりせずしと思ふべしやは

右の第一句に「沖つ波」とあるのは勿論「沖つ白波」の巻名をよみこんだものであるが、一首の心は、この場の雰囲気が涼方に傾いていたのに対して、公任が『沖つ白波』の巻まで読んでごらんない。『吹上』の巻のすばらしい御殿にばかり気をとられて、ひとり涼だけをよいとばかりいえるでしようか」と、仲忠に肩をもったように解される。とすると、この優劣論の初期にあつては、読者たちは「吹上」巻の涼の優位にばかり心を寄せて、涼が今宮を、仲忠が女一宮をめとることに落ちつく「沖つ白波」巻まではあまり読んでいなかったのかも知れない。この点、仲忠びいきの清少納言は、涼方に「帝の御女やは得たる」と反撥して、「沖つ白波」の結果をよく知っていたことがわかる。

五

「蔵開」以後の成立の時期については詳しいことはわからないが、かつて指摘したこともあるように、「櫓の上」⁽⁵⁾下巻に雪の山のことが見えるのは成立期を推定する上に注意してよいことである。この行事風習については、『禁

秘抄』に「事始大略一条院御時以後也」とあって、ほぼ一条院の御代からはじまった行事であることを伝えており、事実『枕草子』の有名な雪山の段などが現存の文献上の初見であるから、やはり一条朝に入ってから行事ということはほぼ認めてもよいと思われる。

また、この雪山のことが見える直前には、

十一月ついたちより、いとほるかにて、げざんとてわたらせ給ふほども、びんなしとて……

(桜の上・下P 1809)

とあって、ここに十一月朔日の見参ということが見えている。これについては諸注不明としているが、十一月朔日の見参とあれば、おそらく朔旦冬至の見参であろう。朔旦冬至、つまり十一月一日が冬至に当った時は、暦の上では一くぎりであるから諸卿参内して賀を奉るならわしであったことが諸文献に見えている。もしこの条が朔旦冬至の見参を意味するものならば、これは二十年に一度しかない暦上の行事であるから、成立時期を考える資料になるであろう。この頃の朔旦冬至は、村上帝の天暦九年(九五五)、円融帝の天延二年(九七四)、一条帝の正暦四年(九九三)などであるが、仲忠、涼の優劣論議や雪山などとの関係から推せば、これは一条朝の正暦四年十一月一日の朔旦冬至の見参をふまえているということができよう。そのほか、三谷栄一氏が指摘された「藤原君」⁶巻における『拾遺集』の歌の流用なども、成立を引き下げる材料であり、『うつほ物語』全篇の成立は、少くも一条朝に入ってからのものであるべきであろう。

○

以上、大略ながら『うつほ物語』の成立時期について、僅かな資料をたよりに推察してみたが、これを要するに、村上朝の天暦頃にはすでに古い形の「俊蔭」巻の存在が認められるが、その『うつほ物語』としての全篇の成立は、一条朝も正暦以後になるのではないかということになる。これらの大まかな成立の見取図が、内部からの成

立論とどう結びつくかは今後の課題であるが、少くも『うつほ』二十巻を単純に一時の成立と見なすことはできないように思われる。それとともに円融朝の末年に没した一人の学者をその全編の作者に擬することも、当然再考されなければならないまい。

注 1 小西甚一氏「俊蔭卷私見」(国語国文 昭和29年1月)

2 片桐洋一氏「宇津保物語の構成」(国語国文 昭和29年9月)

野口元大氏「俊蔭の成立」(宇津保物語研究会々報1)

3 国文叢書「宇津保物語」頭註

4 中村忠行氏「『宇津保物語』「内侍督」「沖つ白波」巻の年立と成立」上・下

(国語と国文学昭和40年1・2月)

5 拙稿「うつほ物語作者攷」(国文学研究18集昭和33年10月)

6 三谷栄一氏「宇津保物語の増益」(『宇津保物語新攷』所収)

(付記) 本稿は昭和四十三年秋、同志社大学で開かれた中古文学会秋季大会において発表した稿に補筆したものである。